

## 動詞的形容詞と形容詞的動詞 学習者の母語との対照から

リュブリャーナ大学  
重盛千香子

### 1. はじめに——品詞間の境界

日本語を学習する場合も、他のいろいろな言語の学習の場面でも、語彙の習得においてはそれぞれの単語の統語的ふるまいや形態的变化などにより、一定の特徴によってくくられた幾つかの品詞グループに分けて整理していく作業が行われる。どの言語にも一般性と例外とが必ずあるものだが、意味的特徴をも考慮に入れ、品詞分類にのっとって語彙を学習するのが経済的でもあり、合理的なのである。寺村(1982)は、日本語の品詞について「品詞間の連続性」という節を設けて次のように述べている。

、、、日本語は、英語などのヨーロッパ語と比べると、文法のほとんどあらゆる面で異なる類の間の連続性が強いのではないかという感じがする。中国語は、その英語との構文上の類似性がよく話題にされるけれども、少なくとも品詞分類に限っていえば、日本語と同じような連続性の強い言語のように思われる。朝鮮語もそうであろう。日本語の文法を考える過程でいろいろな分類を行うとき、相似と相違をいわば複線的に考え、どの特徴を特に優先して当の分類をするのか、なぜある特徴を他に優先させるのか、ある類と他の類の境界域に両者のどういふ特徴が共存するのか、などを常に問題意識としてもっていなければならないと考える。(寺村1982:62-63)

日本語教育の場面では、寺村の言う「問題意識」を、学習者の母語や既習言語との比較において特に頻繁に呼び起こすことにより、日本語の習得過程における無駄(誤用)を少なくする手助けが出来ると考える。

ここでは、主な品詞のうちの動詞と形容詞に焦点をしぼり、この二つの境界域にどんな特徴が共存するかを考える。また、日本語教育の現場に直接役に立つデータの蓄積をめざし、まずはじめの手がかりとして、語彙の範囲を初級レベルに限定し、さらに、筆者が実際に指導に携わっているスロヴェニア語話者の学習場面を考慮して、スロヴェニア語の基礎語彙との対照研究を活用する。

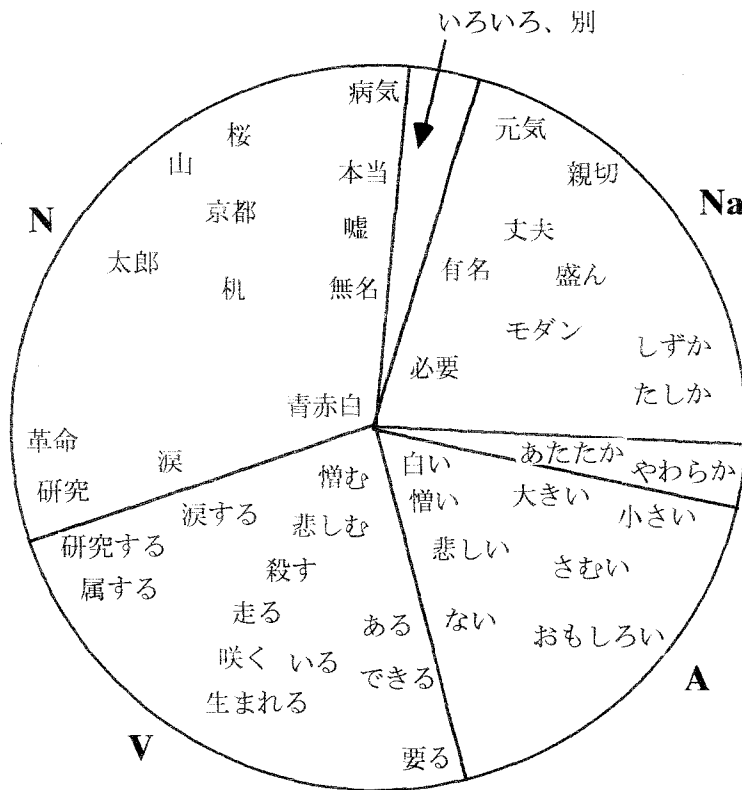
### 2. 動詞表現、形容詞表現

動詞と形容詞というふたつの品詞に共通の大きな特徴として、どちらも述語になり得るという構文機能があるが、これは日本語に限らず、スロヴェニア語やその他の多くの言語にも見られる特徴である。また、両品詞の意味特徴を考えた場合、動詞は主に行為や現象を表わし、形容詞は状態や属性を表わす、という大きな区別があり、これも日本語だけに限ったことではないと思われる。

寺村は、実質語4種(名詞、ナ形容詞、イ形容詞、動詞)の連続性を次のような図(図1)に示しているが、特に、動詞と形容詞の境界域に位置するものとして、「ある」「(日本語が)できる」「(お金が)要る」をあげ、これらはその意味が状態や属性を表わすことを考えれば形容詞に分類できる、としている。(寺村

1982:64) また、この図をよくみると、日本語では「憎む、憎い」「悲しむ、悲しい」など、動詞、形容詞ともに単純語彙として存在する感情表現や、同じ存在表現でも肯定は動詞的、否定は形容詞的に活用する「ある、ない」などがこの境界域の特徴として見られることがわかる。

図1 実質語の分類 (寺村1982:74より)



### 3. 他動性 (Transitivity) に関連して

#### 3.1 非対格自動詞

日本語では、従来から動詞を他動詞または自動詞のどちらかに分類するというのが行われ、多くの辞書類にも自・他の別が記載されている。この二分類の持つ意義や有効性はここでは論じないが、自動詞、または他動詞の定義づけに関して、Kiryu(1999)は次のように指摘している。

From the viewpoint of the Prototype approach, it is difficult to formulate a single prototype of intransitivity as opposed to a prototype of transitivity. プロトタイプ論の考え方からいうと、他動性の典型に対して、自動性の典型を一つにしぼるのは難しい。(Kiryu 1999:45 筆者訳)

そして、類型論の分野で、自動詞には二つのタイプがあると言われていることをもとに、自動詞2種の区別を動作の軸と変化の軸のどちらかに属するものと考えて2分類することを提案している。自動詞の二つのタイプとは、動作の仕手を主語に取る非能格動詞と、対象物を主語とし、対応する他動詞がある非対格自動詞の2種である。Perlmutter (1978) は非対格性の仮説(Unaccusative Hypothesis)を紹介したが、

この仮定の延長として、Perlmutter & Postal (1984) が示した自動詞 2 類の意味的特徴は次のようなものである。(影山1996:20-21より)

#### 非能格自動詞

- 1) 意図的ないし意思的な行為
- 2) 生理的現象

#### 非対格自動詞

- 1) 形容詞ないしそれに相当する状態動詞
- 2) 対象物を主語に取る動詞
- 3) 存在ないし出現を表わす動詞
- 4) 五感に作用する非意図的な現象
- 5) アスペクト動詞

Perlmutter (1978) 以来の自動詞に関する研究は大変興味深いものだが、ここではこれ以上論じない。筆者が感じていることは、この 2 種の自動詞のうちの後者、非対格自動詞が、動詞のなかでもより形容詞に近い、つまり動詞と形容詞の境界域に位置するものであろう、ということである。Perlmutter & Postal (1984) の特徴づけの

(1) ~ (5) を意味内容とする表現群である。

### 3.2 形容詞における「他動性」

一方、現代スロヴェニア語の文法書では、「他動性」(prehodnost = transitivity [英]) は次のように定義されている。

Lastnost besed (glagolov, pridevnikov, povedkovnikov, samostalnikov), da se uresničujejo (pomensko dopolnjujejo) ob kakem predmetu, npr. najti lepe zvončke, sit življenja, žal denarja, okopavanje solate. Za take glagole oz. izraze pravimo, da kažejo potrebo po dopolnilu. 目的語を伴うことでその意味を実現する語(動詞、形容詞、名詞など)の性質。[例] 美しい雪見草を見つける、人生にうんざりする、金が惜しい、サラダ菜の掘り起こし。このような動詞その他の表現について、補語を必要とする、と言う。(Toporišič 1992:210-211 筆者訳)

つまり、他動性は、日本語でいう動詞における自他の別だけではなく、形容詞や副詞、さらに主に動詞などからの派生名詞においてもみられる現象としてとらえられている。たしかに、形容詞は一般に状態や属性を表わすと言われる中で、同じ状態性でも、他者との関係においてはじめて状態を問題に出来るものがいくつもある。上記の定義の説明の例で言えば、「うんざりする」「惜しい」などは形容詞(的)表現であるが、「人生に」「金が」などの語が伴わなければ文としてはあまり意味をなさない。

日本語の形容詞に関する研究でも、主観的表現と客観的表現の区別によってこの品詞の下位分類を考える時枝(1950)をはじめ、感情・感覚形容詞と属性形容詞では構文的なふるまいに違いがあることを分類の基準にするべきだという矢沢(1998)など、どれも形容詞の分類は、上記の広い意味での「他動性」、補語を必要とするかどうかという問題から発している。

このように形容詞の側から見てみると、品詞間の連続の中で動詞により近いほう

に位置する形容詞は、主観的表現に使われるもの、または感情・感覚形容詞に当たるものだと考えられる。

#### 4. 初級語彙リストより（日本語とスロヴェニア語の場合）

日本語とスロヴェニア語の第二言語学習者用の語彙リストから、それぞれ初級レベルにおける動詞約200語ずつを取り上げて比較対照した。（重盛1998）それぞれの対訳リストから、形態的に見て、一方の言語では動詞表現であるがもう一方の言語では形容詞表現であるものを以下に示す。参考のため、スロヴェニア語の後に英訳を添える。

##### 日本語では動詞表現であるが、スロヴェニア語では形容詞表現が対応するもの

（スロヴェニア語の形容詞は繫辞 *biti* [英*be*]の助けを借りて述語になる）

（学校を）休む	<i>biti odsoten</i>	'to be absent'
喜ぶ	<i>biti vesel</i>	'to be happy'
間に合う	<i>biti pravočasen</i>	'to be on time'
（AはBと）違う	<i>biti drugačen</i>	'to be different'
見える	<i>biti viden</i>	'to be visible'
要る	<i>biti potreben</i>	'to be needed'

##### スロヴェニア語では動詞表現であるが、日本語では形容詞表現が対応するもの

<i>hoteti</i>	'to want'	～たい、欲しい
<i>ljubiti, rad imeti</i>	'to like'	好きだ
<i>bati se</i>	'to fear, to be afraid of'	こわい

上記のリストから分かることは、まず、日本語にもスロヴェニア語にも「形容詞的動詞」、つまり、形態的には動詞であるが品詞間の連続では形容詞との境界域に位置するらしい語彙がある、ということだ。

日本語のリスト、「休む」～「要る」を検討すると、どれも典型的な行為を表わす動詞ではない。典型的な行為とは、行為者（通常人間）がみずからある意図を持って行動することで、「魚をとる」「町へ行く」などが考えられ、主語（日本語ではガ格）が有情物であることが条件になるが、リストにある6語のうち、有情物のみが主語にあてはまるのは「休む」と「喜ぶ」だけである。そのうち「喜ぶ」は感情表現で、何か外界に主体を喜ばせる原因があって、その原因に影響された主体に喜ぶという状態が発生する、他動性を伴うものである。また、ここにあげた「休む」の場合は、「日曜日はうちでゆっくり休む」の意味（この場合はスロヴェニア語でも動詞語彙 *počivati* 'to rest'）ではなく、本人がいるべきところにいる、という意味の方で、場所や会合などの背景が文脈に必要であり、意図的に休む（サボる）場合と、止むを得ず欠席する場合の両方が考えられ、微妙なところである。つぎに、「間に合う」と「違う」は、行為ではなく二つ（以上）のものの関係をあらわす述語である。

スロヴェニア語のリストでは、3語とも感情、感覚を表わすものがあがっている。特に '*bati se*'（こわい）は、意図性のない、受け身的に発生する感覚である。

## 5. 初級学習者への語彙と構文の導入

日本語教育の場面では、これらの動詞、または形容詞の形態的な違いが誤用を招く恐れがあると考えられる。初級レベルで導入するこれらの語彙は、その意味と同時にいくつかの典型的な例文を提示し、その構文構造がどんなものであるかに注意を促す必要がある。語彙習得の時点から、これらの表現は学習者の母語（ここではスロヴェニア語）における表現とは違った文構造を持つことを知ってもらわなければならない。

現在、リュブリャーナ大学で日本語を学習しているスロヴェニア語母語話者の作文から、上記のリストにあがった動詞と形容詞の品詞境界域にある語句の使用を見ると、次のような誤用文が見つかった。

### 好きだ／～たい

\*ジャマイカとハワイを好き見たいです。

\*私は大好き写真をとります。

### ほしい／～たい

\*私は人と話すのがいちばんほしいですから、この勉強をえらびました。

### 要る

\*旅行するためにお金がいられます。

### 違う

\*それは学生にとって違うですが、、、

\*日本の学校の制度はスロベニアの制度と違いです。

\*大学に入る時後からとても違い生活が続きます。

まず、スロヴェニア語では動詞だが日本語では形容詞の、希望、欲求、好き嫌いを表わす一連の表現がある。日本語教科書では、「欲しい」と「～たい」がほとんど同時に導入されることが多いが、この二つの使い方の違いを特に念入りに教える必要のあることが分かる。特にスロヴェニア語話者を対象とする日本語教育では、スロヴェニア語の副詞 *rad* が曲者である。*rad imeti* は「(なにかが)好きだ」であるが、*rad* + 動詞「好んで～する、～するのが好きだ」という構文もあるため、上記のような誤用が生じる。また、「要る」の場合は、必要としているモノが必ずガ格で表現されることをすぐに学習させないと、わざわざ受け身形「\*要られる」を作るような誤用が生じる。「違う」の場合は、動詞ではあるが意味が形容詞的であることと、たまたま五段活用で、イ形容詞と取り違えやすい語形が現われることがあり、誤用が多くなっていると思われる。

文法事項導入の場面で、意味、形態、構文の3拍子をそろえ、どのようにバランスをとりながら教えていけば最も無駄を省くことが出来るのか。どれも、そんなことを考えさせる実例である。

## 6. おわりに

会議発表の折、三宅和子さんに、日本の若者のあいだに「違かった」「～みたく」

などの言い方が増えている、という事実をご指摘いただいた。前者は、上の例にも見たように、品詞が動詞であるが意味的には形容詞に近い語彙をその形態的類似性を利用して形容詞として活用する例であり、後者は、活用しない副詞であるものをその形態的類似性と経済性が作用して、やはり形容詞として使っている例である。第二言語としての日本語学習者だけでなく、母語話者の間にもこのような現象があることを考えると、言語が変容して行くことも忘れてはならないことがわかる。

ここでは、日本語とスロヴェニア語の例を検討したが、その他いろいろな言語においても、動詞的形容詞、または形容詞的動詞があるだろうと思う。そして、それらの語は、共通の意味領域を占めるものが多いのではないか。少なくとも、典型的な行為を表わす語彙が形態的に形容詞だというケースはかなり可能性が低いはずだ。反対に、一般的属性を表わす語彙が形態的には動詞だという場合が日本語にはかなりある。とんがる、角ばる、そびえる、連なる、など、金田一(1950)の第4種の動詞で、必ずテイル形で用いられる。

冒頭に引用したとおり、寺村(1982)は、ヨーロッパ語に比べて日本語のほうが品詞間の連続性が強いと感じているが、ほんとうにそうなのか、その連続性が強く現われているという証明はどのようにするのか、興味深い問題だと思う。

#### 参考文献

- 市川保子(1997)『日本語誤用例文小辞典』 凡人社  
影山太郎(1996)『動詞意味論—言語と認知の接点—』くろしお出版  
金田一春彦(1950)「日本語動詞の一分類」『言語研究』15  
重盛千香子(1998)「日本語とスロヴェニア語の基礎動詞—ヴォイスの観点からの対照—」『第11回日本語教育連絡会議発表論文集』カレル大学、プラハ  
寺村秀夫(1982)『日本語のシンタクスと意味I』くろしお出版  
西尾寅弥(1972)『形容詞の意味用法の記述的研究』国立国語研究所  
矢沢真人(1998)「日本語の感情、感覚形容詞」『言語』Vol. 27 No.3、大修館  
Croft, William (1994) *Voice: Beyond Control and Affectedness*, Fox, Barbara & Paul J. Hopper (eds.) Voice: Form and Function, 89-117, John Benjamins Publ. Co., Amsterdam/Philadelphia.  
Kiryu, Kazuyuki (1999) *Conceptualization and aspect in some Asian languages, Tense-Aspect, Transitivity and Causativity*, eds. Werner Abraham & Leonid Kulikov, John Benjamins B.V.  
Lee, W.R. (1968) *Thoughts on Contrastive Linguistics in the Context of Language Teaching*, Georgetown Monograph No. 21.  
Shigemori Bučar, Chikako  
(1999) *Atypically Transitive Expressions Used in Short Compositions of the 2nd Year Students of the Japanese Language*, Azijske in afriške študije št. 1-2, letnik III, FF Ljubljana.  
(2000) *Uresii, tanosii, omosiroi (vesel, zabaven ali zanimiv?) --- Japonski pridevniki za izražanje občutkov*, Azijske in afriške študije št. 3, letnik III, FF Ljubljana.  
Toporišič, Jože (1992) Enciklopedija slovenskega jezika, Cankarjeva založba, Ljubljana.